

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

農作物技術情報 第2号 花き

発行日 平成23年 4月26日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどう 株仕立ての徹底、土壌水分管理、雑草防除を適正に行いましょう
- ◆ 小ぎく 晩霜対策・初期生育促進のためトンネル等の被覆を実施しましょう
定植、整枝などの作業を計画的に進めましょう

1 りんどう

(1) 生育概況

3～4月の低温気象の影響により、露地の生育状況は平年並みからやや遅れ気味となっています。また、各地域の育苗センターでは、震災の影響により播種が遅れたところが多く、主要産地では3月末から4月初めの播種となっています。

(2) かん水

圃場が乾燥すると生育停滞を招きます。乾燥しないよう適量のかん水を行い生育を促してください。通路(うね間)かん水の場合、根の障害を避けるため、気温が高い時間帯を避けて曇天の日や夜間に行います。また、長時間の滞水は避けてください。

(3) 株仕立て

株仕立ては、1株当たりの立基本数を制限することで切り花品質を確保し、株の衰弱を防ぎ収穫年数を確保するための技術です。株当たり7本を目安に整理しますが、株が弱い場合は収穫する茎をさらに減らします。作業が遅れないよう留意し、草丈が30cm頃までに終えるようにします。ウイルス病の伝染を防ぐため、刃物は使用しないで手での折り取りが基本となります。

また、間引いた茎葉には、病害虫が着いている場合があるので、必ず圃場外へ処分します。

(4) 追肥

春の基肥に「りんどう一本勝負」を使用した場合や、また、定植時に「りんどう定植2年肥料」を使用した場合の2年目は基本的に追肥は不要となります。しかしながら、葉色が薄い、生育が緩慢な場合には追肥が必要となります。

また、基肥に「りんどう専用肥料」や「CDU S-555」を使用した場合、通常は施用後1か月程度で肥効が切れますので追肥します。

花芽分化の時期に肥料が不足すると花段数やボリュームなどの品質が劣る場合があるので、適宜追肥することが必要となります。早晩性に併せて追肥しますが極早生種で5月上旬、早生種で5月下旬、中晩生種で6月上旬、極晩生種で6月中旬を目安にしてください。

追肥には窒素・カリ成分が主体で速効性の肥料を使用し、施肥量は窒素成分量で5～8kg/10aを基準とします。一度に多量の追肥を行うことは根をいためる等の危険があるので2～3回に分けて様子を見ながら施用し、葉が大きい、葉色が濃い場合は追肥を控えめにします。

(5) 生理障害対策

葉先枯れ症状は、5月上旬頃からの生育が盛んとなる時期に発生し、急激な茎葉の伸長時の圃場の乾燥と石灰分の成長部での不足が要因とされています。圃場の乾燥を防ぐため、状況を見ながらかん水を行います。また、薬剤散布時に石灰資材を混ぜて葉面散布を行うことで被害の軽減が期待できます。



葉先枯れ症状

(6) 雑草対策

気温上昇に伴い雑草の生育も盛んになります。遅れないよう早めの処置が必要です。適用のある除草剤を有効活用するとともに、株の周辺は手で抜き取ります。

(7) 病害虫防除

生育初期は葉枯病とハダニを中心に防除を行います。いずれも初期の罹病や寄生がその後の拡大の元となるので、初期防除を徹底します。

前年度ハダニ多発圃場の残茎中などで越冬した成虫は、既にりんどうの新しい茎へ着き、茎の伸長とともに中上位葉へ寄生が広がっています。圃場をよく観察して発生状況を把握し多発前に薬剤散布で防除します。ダニ剤は同系薬剤については年1回の使用とし、葉裏にムラの無いように散布します。

(8) 施設栽培

施設での促成・半促成では、花芽分化期までは温度を維持しますが、それ以降は徐々に温度を下げ、最低気温が10℃を上回るようになったら施設を開放して茎の軟弱化を防ぎます。

病害虫では、リンドウホソハマキや乾燥によるハダニ発生に注意します。

(9) 育苗

間引きや移植が終わる播種後30日頃から液肥による追肥を開始します。苗の生育状態をよく観察し、施用してください。

播種時期は例年どおりから大幅に遅れたところもありますので、定植時期はまちまちとなると思われます。それぞれの地域にあわせて定植の準備を進めて下さい。

2 小ぎく

(1) 生育概況

昨年と同様3～4月が低温で推移しているため生育、作業の遅れが心配されるところです。

4月に入り8月咲き品種の挿し芽が行われていますが、さし芽苗の生育の遅れが心配されます。また、圃場が乾きにくいことから定植準備も遅れ気味となっています。

(2) 定植

定植は品種ごとの適期を守り、老化していない苗を植えることが基本となります。土壌が適度に湿った状態で定植し、定植後はかん水を行って土を落ち着かせて下さい。

気温が低い場合は、天気予報に留意し、降霜が予想される日の定植は避けるようにします。また、5月中旬頃までは晩霜の心配がありますので、霜害の軽減と低温による活着や生育の遅れを防ぐため、ポリフィルムや不織布を用いた保温・防霜対策を行ってください。トンネル被覆をすることで初期の生育確保や草丈が伸びにくい品種の品質確保にも有効です。なお、トンネル被覆を行う場合は事前十分にかん水を行うことと、密閉せずに換気口を空けることを忘れずに行ってください。

(3) 定植後の管理

定植後に土壌の水分が不足すると根の発育が抑えられて生育が停滞しますので、圃場が乾燥しないよう適宜かん水を行います。初期生育が不足して後半に旺盛な生育となった場合、草姿が乱れる原因となるので留意します。

(4) 摘心

摘心は芽の先端部を小さく摘み取ります。大きく摘心すると側枝の発生数が少なくなることがあります。摘心漏れが無いように、作業の数日後圃場の見回りを行いましょう。

省力化を目的に定植前に摘心する事例も見られますが、品種によっては側枝の発生が少なくなる場合があるので、品種に応じた作業を行います。



摘心直後の状況

(5) 土寄せ

無マルチ栽培の場合、土寄せを行うことで新根の発生を促し、生育を旺盛にすることができることから切り花のボリューム確保に有効です。また、中耕を兼ねることで雑草の抑制効果もあります。土寄せは、2回行う例が多く、1回目は側枝が10cm前後に伸びた頃、2回目は整枝後となります。

(6) 病虫害防除

白さび病は親株から感染した苗を圃場に持ち込んで発生することが多いので、生育初期から予防散布を徹底します。薬剤はローテーション散布に努めます。

アブラムシやナモグリバエの発生が見られますので、初期の防除を心がけてください。

(7) 9月咲き品種の育苗

9月咲き品種は5月下旬から6月上旬が定植期となるので、挿し芽の時期は5月上～中旬となります。この時期は気温が高くなり、例年トンネルの開け忘れによる高温障害や、過度の遮光による発根の遅れが見られるので、管理には十分注意して下さい。

3 トルコギキョウ

(1) 生育概況

8月咲作型では定植がされ、その後開花の作型の育苗がおおむね順調に生育しています。

(2) 圃場準備

トルコギキョウは根が深く張るので、深耕することと同時に定植時に下層まで水分があることが大切です。定植時期を勘案して計画的に圃場の準備を進めましょう。圃場の準備ができたらしちに定植するというスケジュールが理想です。

施肥量は土壌診断に基づいて判断し、過剰とにならないことを心がけます。

(3) 定植とその後の管理

セル成型苗では、根が巻いて根鉢が固まった状態になれば老化していると判断します。根が伸びすぎない若い状態での定植が大切です。また、苗をほぐして植える場合はていねいにほぐし、根を丸めず素直に伸ばした状態で植えます。植え付けは土を押さえつけないようにして行います。

定植後は多くの水分を必要としますが、過剰なかん水は避けます。土壌の表面が乾いたらたっぷりかん水するようにします。

トルコギキョウの生育適温は15～25℃なので、この範囲を目標に温度管理します。

4 スターチス・シヌアータ

(1) 無加温栽培ではガクの着色始めの時期となっています。無加温栽培では5月から1番花の採花始めとなります。

(2) 灰色かび病が発生しやすいので、施設の湿度が上がらないよう十分に換気を行ってください。降雨時など施設を閉める場合は、循環扇の利用も効果的です。2番花の収量・品質向上のためには1番花の開花中に液肥で追肥をすることが有効ですが、過剰となった場合翼の肥大や茎の軟弱化を招くほか、灰色かび病の誘因となるので留意します。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]

[~6月15日]

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来

次号は5月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。